

城陽市障がい者自立支援協議会

第7回 サービス調整検討部会報告書

平成 24 年 12 月 13 日

報告者 部会長 障害者生活支援センターは一もにい内田 照美

標記について下記のとおり報告します。

日 時	平成 24 年 (2012年) 12 月 3 日
場 所	地域福祉支援センター
出席者	城陽市福祉課 障害福祉サービス提供事業所 (城陽作業所、城陽市社会福祉協議会訪問介護センター、ものづくりスペースみんななかま、身体障害者デイサービスセンターすいんぐ知的障害者デイサービスセンターあつぷ) 相談支援事業所・は一もにい
検討課題	○身体障害・高次脳機能障害のある利用者について支援内容を振り返る

【議事録】

1. 身体障がい及び高次脳機能障害のある利用者に対する支援について

城陽市で一人暮らしをしていた利用者で、現在は他市に転出している。支援途中で引き継ぐことになったケースだが、これまでの支援内容を振り返り、意見交換を行った。

【ケース紹介】

交通事故に遭い、半身麻痺・高次脳機能障害がある20代の利用者。病院や施設でのリハビリや職業訓練等を経て、地域生活に戻ったが、イライラするとすぐに感情が爆発し、家族との暴力が絶えなかった。日中に通う生活介護事業所でも、頻繁に対人トラブルとなる。そのため他市のアパートで一人暮らしを始めたが、すぐにアパート住人の物音が気になること等で住人とトラブルになり、城陽市に転居して来た。相談支援事業所が関わり、服薬管理をはじめ、日中活動、余暇活動、食事の管理等、生活全般に少しずつ支援は進み、新たに利用し始めた生活介護事業所への通所を定着しようと試みているところに、アパートの住人からの苦情で転出することになってしまった。

2. 意見交換

【精神科通院と服薬】

本人の自宅における生活等の見えない部分を関係機関と共有するように努め、相談支援員が精神科受診に同行。本人が主治医に伝えられない状況や服薬による本人の変化、日中活動の様子や食生活等、服薬の微調整の参考となるよう伝え、処方された薬の内容は関係機関に報告し、日中の変化についての様子を把握することを繰り返した。本人の服薬に対する意識にも変化が表れ一定

の状態まで安定してきた。

【医療機関からの情報収集】

本人の特性等について医療情報の収集と具体的な見解を医療機関に求め、脳の損傷部分はどこか、残存機能がどんな行動を起こしているのか等、関係機関に対する情報提供を十分に行う必要があった。その上で、日中に本人と関わる中で、本人の記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害等について、具体的に分析・把握し、支援者が介入して改善していくことが望ましかった。しかし、事故後の医療情報の収集を試みたものの、聞き取りが不十分だった。主介護者である母が亡くなり、本人の様子をうかがい知ることが出来なかったことも大きかった。

【生活介護事業所利用】

本人は2つの生活介護事業所を利用しており、本来はどちらか1つの事業所に決めて、しっかり通所することが望ましかった。また、能力的には就労に向けた取り組みを行ってもよいケースだった。通所している事業所に対して、本人の障がい特性を踏まえた活動内容を検討してもらうよう提案していく必要性もあった。

【生活介護事業所送迎】

主治医からの「午前から通所し生活リズムをつけるような支援が必要」との助言から、送迎による通所を開始。本人は午前から通所するようになってきたが、近隣住人と挨拶や会話を交わす機会がなくなった。住人とのトラブルによりアパートを退去しなければならなくなったが、近所との相互関係がスムーズにしていれば、住人からももう少し柔軟な目で見てもらえたのではなかったか。地域生活を送る上で地域住民との挨拶や会話がいかに重要であるかを改めて感じた。また、他市に移ってから、送迎がなければ通所する意欲が持てなくなった。本人が自分で出掛けるという意欲をなくしたことは反省点であり、今後の課題である。

○ まとめ

今回のようなケースについては、医療情報を知ることが最優先だが、その情報を生活上の行動に結び付けて支援の方法を検討し、介入していくことがより重要である。記憶障害については、記憶保持期間がどのくらいなのか、忘れてしまう前にサポートをすれば、予定の時まで記憶しておくことが出来るのか、注意障害については、何が気になり注意がそれてしまうのか等を具体的にみていくことが重要。遂行機能障害についても、指示されないとやり遂げることが出来ないのであれば、指示があれば出来るのか、社会的行動障害について、自己統制の部分は、脳の残存機能が働いている。自己コントロールは、支援者が介入して改善する等、関わる中で具体的に分析・把握し支援者が介入し改善していくことが重要である。